

ISO 9000/9001改正（2026）を “教育テーマ”に落とす



「ISO 9001が2026年9月に改正になるらしい」

そんな話を耳にして、心のどこかで——

「まだ先だけど、何から手を付ければよいのだろう」

「現場に影響が出るなら、早めに社内に説明したい」

「認証審査で“何を見られるか”が変わるのが一番こわい」

と感じていらっしゃる方も多いのではないのでしょうか。

今日は、その“もやもや”を少しでも軽くするために、

- ・なぜ改正されるのか（背景）
- ・改正内容を読むときに、特に気を付けたいポイント（要約）
- ・改正を「社内教育テーマ」に落として、実務に接続する研修のイメージを、できるだけわかりやすい言葉でまとめます。

※ISO/TC 176（ISO 9001を所管する委員会側）の情報では、改正版ISO 9001は「2026年9月の発行予定」とされています（ただし最終確定は今後の手続きで前後する可能性があります）。

■ 1.そもそも、なぜ2026年に改正されるのか？

ISO 9001は「一度作ったら終わり」のルールではなく、世界中の企業の実態に合わせて“使える規格であり続ける”ために、定期的に見直されてきました。

今回の改正の大きな動機は、ひと言でいえば——

“品質マネジメントが向き合う環境が、2015年当時と大きく変わった”ことです。

例えば、皆さまの職場でも、こんな変化はありませんか？

- ・サプライチェーンが複雑化し、外部委託・協力会社との連携が当たり前になった
- ・デジタル化／データ活用が進み「プロセスの見える化」のやり方が変わってきた
- ・リスク（不確実性）への備え、事業継続・レジリエンスの重要性が増した
- ・ESG・サステナビリティの流れが強まり、気候変動への配慮が“企業の前提”になった

実際、ISO 9001:2015には「気候変動（climate action）」を意識させる追補改正（Amendment 1）が2024年に発行されています。

（次ページへつづく）

この流れが、2026年改正にもつながっていると捉えると理解しやすいと思います。

また、ISO 9000（用語と基本概念）側も、ISO 9001:2026に整合するように、用語・定義・概念のアップデートが進められています。

■ 2.改正内容で「気を付けなければいけないこと」

まだ最終版が出ていない段階なので、細部は変わり得ます。ですが、今の段階からでも“準備の勘所”は見えてきています。ここでは、社内で説明するときに使えるように、注意点を「実務で起きやすいこと」に落として要約します。

【注意点A】“追加要求”よりも「解釈のズレ」がリスクになる

改正で怖いのは、要求が増えることそのものより、

「これまで同じ言葉を“自社流に解釈していた”部分が、外部（審査・顧客・監査）と噛み合わなくなる」ことです。

たとえば「プロセスの有効性」「リスクと機会」「力量」「外部提供者の管理」などは、解釈がズレると一気に指摘につながりやすい項目です。

【注意点B】“気候変動”は、書類を増やす話ではなく「判断の説明力」の話

2024年の追補改正に関連して、今後は

「自社の事業にとって気候変動が“関係ある/ない”をどう判断したか」

「関係があるなら、どのプロセスでどう織り込んだか」

が問われやすくなります。

ここで大切なのは“立派な文書”よりも、筋の通った判断と説明です。

【注意点C】利害関係者（顧客・協力会社・社内）への向き合い方が「運用」まで見られやすい

ISO 9001はもともと顧客重視ですが、改正を機に

- ・要求事項の取り込み（契約・仕様・変更）
- ・協力会社との合意形成（品質基準、変更連絡、是正）
- ・社内の情報伝達（部門間、設計⇔製造⇔品質）

の“運用のつながり”がより注目される可能性があります。

現場の皆さまが「それ、実際は回っていないんだよね…」と感じる部分ほど、教育テーマにする価値があります。

【注意点D】内部監査・マネジメントレビューが「形式」から「経営に効く議論」へ戻される

「監査がチェックリストの確認会になっている」

「マネジメントレビューが“報告会”で終わっている」

もし少しでも心当たりがあれば、改正を機に立て直す絶好のタイミングです。

“規格に合わせる”だけでなく、“会社の成果につなげる”方向に、教育で再設計できます。

■ 3.改正（2026）を“教育テーマ”に落とす：講師派遣・出張研修のご提案

改正対応で最も効くのは、分厚い資料を配ることではなく、
「現場の言葉で腹落ちする」「自社のプロセスに結び付けて考えられる」教育です。

JUSEの講師派遣・出張研修では、次のように“実務での活用”を前提に構成しています。

- (1) 90分：改正の背景と“まず押さえる全体像”
 - ・ 2026年改正の狙い（なぜ今なのか）
 - ・ ISO 9000/9001の関係（用語・概念の変化が運用に与える影響）
 - ・ 「追加要求」より怖いポイント＝解釈ズレの起点を整理

- (2) 半日：審査・監査で困らないための“説明力”トレーニング
 - ・ 気候変動の関連性判断を、過不足なく説明する練習
 - ・ リスクと機会を、現場の言葉→監査で通る言葉へ翻訳
 - ・ 不適合が出たときに、是正が“形だけ”にならない進め方

- (3) 1日：内部監査員向けアップデート（実践演習中心）
 - ・ 改正を踏まえた監査の観点（質問の作り方、証拠の取り方）
 - ・ プロセス監査の“見え方”を揃える
 - ・ 監査結果を、マネジメントレビューと改善につなげる

「改正対応」と聞くと、どうしても身構えてしまいますよね。

でも、見方を変えると――

改正は“いまの運用の弱点を、社内で納得感を持って直す口実”にもなります。

特に、部門間のズレ・引継ぎ・変更管理・協力会社との連携など、日々の困りごとを改善へつなげるチャンスです。

もしよろしければ、貴社の業種・規模・認証範囲（設計あり/なし、拠点数、委託の比率など）を踏まえて、

「改正を教育テーマに落とすなら、どこを軸にするのが最短か」
を、オンライン相談で一緒に整理します。

ぜひ一度お気軽にご相談ください。

一般財団法人日本科学技術連盟
品質経営推進センター 営業・企画グループ

[お問い合わせはこちらから](#)

*社内セミナーに関するお問い合わせは、上記リンク先よりお願いいたします。